

眼前に置かれたカップに滑らかな波紋が生じる。軽い会釈を返しながら静かに本を置き、舐めるようにコーヒを口に含んだ。柔らかい苦みが味覚を刺激する。それが喉元を通り過ぎる間止まっていた思考は、やがて現実を認識する作業に戻る。

「お仕事のお話、ではなかったのですか」

名残惜しそうにカップから口を離れた雅は矢継ぎ早に訊いた。置いたカップの中が小さく波打っている。

「ええ。お話ししたのはそう言った内容だと思うのですが」

高そうなスーツを身に纏った男は、にこやかに返す。桐谷幸平、と書かれた名刺を、雅はさりげなく確認する。

「色々コネクションを作っておくのは、いいことだと思いませんよ、梅沢さん」

幸平は雅の名刺には視線を移すことなく言った。僅か程の断絶もない笑顔に、雅は少々辟易し始めていた。

「出版社関係の立食パーティー、ね。興味が無いわけじゃないんだけど」

そこまで言っつて、雅は口を嚙む。彼が興味の有無を問われたら、すかさず無きにしても非すと答えただろう。だが一方で乗り気がしないというのが正直な所ではあった。

幸平は某有名出版社の社員であった。仕事がキツイのか、キリッとした表情に微かな疲れが見えることもあるが、その分は会社の気前はいいのだろう、身体中に高級さを纏っている。対して雅はと言えば、数年前に卸したスーツをもったいなさそうに着ているばかりで、見た目からは清潔さは微塵も感じられない。職業は、と訊かれたら彼は迷わずフリーライターだと答えるだろうが、その実態はフリーターに近い。ら抜きやい抜きなどは職業ライターにあるまじき失態である。しかしながらそのスーツがまだ新しく、糊の利いていた頃の彼はそこそこ名の知れた作家であった。今でこそ、作家の端くれとして細々と生きてはいるものの。

雅が幸平の提案に乗り気がしないのは、昔お世話になった出版関係のお偉いさんに鉢会わせてしまう偶然や『終わった』作家として奇異な目で見られることへの不安を恐れているわけではなく、かといって仕事のためのコネクション作りという浅ましさを、就職活動的なノリに対する毛嫌いではない。単純に、その日はそこに行っているだけの余裕があるのだからかという思案のためだ。

「それ、どれくらいかかるんですか」

雅が興味の矛先を不意に向けると、幸平は黒縁のメガネをクイと上げてから、上機嫌に答える。

「今度開業予定の中野のホテル、分かりますか？」

「ああ、東京一デカイって噂の。それがどうしました」

「うちの出版社がね、そのホテルの密着取材させてもらった関係で、色々と話が回ってくるんですが、お話しした立食パーティーもその関係ですね」

幸平が言うには、要するにそのパーティーとは中野のホテルの完成を祝したものであり、同時に政治家や業界の大物、マスコミ関係者を『もてなす』ためのものであるようだ。こ

うして大々的に催すからには、そのホテルに重大な欠陥があるというわけではもちろんないだろうが、開業前に悪い噂を建てられたり、あるいはいらぬ怒りを買って、荒波を縫っていくような営業を強いられるのも不都合だということだろう。札節を尽くして悪いことなど何もない。

「午前中は記者会見、お昼頃から件のパーティーが催されるそうです。夜には関係者のみで会合を開くとか。ですから、大体四時位までかと」

「なるほど」

雅は相槌を打つが、それだけだった。その代わりに一つ質問を付け加える。

「それ、俺が参加して何か利はあるんでしょうか。双方にとつて」

「もちろん。先ほど申しましたように、これは仕事のお話です。」

梅沢さんにはパーティーの記事を書いていただくと思ひまして。前々からフリーのライターさんにお願いをしようと思っていたのですが、ほら、一年ほど前に一緒にお仕事させていただいたでしょう？その時の記事も確か企業レポートだったと思いますが」

そうですか、と雅は適当に返しつつ、彼はようやく合点がいつていた。要するにスケープゴート。何もやましいことなどしていませんよ、という虚壳空に向けたアピールだ。まあ、それも構わないだろうと雅はそつと、心の中に生まれた些細な主張から目を背ける。

「最近都内のホテルでの人死に、結構あるでしょ」

「ええ、そうですね」

雅はあまりテレビを見ないが、そういうことがあるのは人伝で知っていた。ニュースでは病死と伝えられているらしいが、そんなに頻繁に起きるものだろうか、と、雅は訝っている。

「偶然とは言えど、そういうこともありますからね、ホテルとしてもイメージアップをしておきたいようですよ」

「それで日時は？」

「二週間後、四月の半ばですね。詳細な日時は、お引き受けいただければ招待状をお送りしますよ」

「申し訳ありませんが、この場で即答はできません。四月半ばは引越して忙しくてね」

「おや、引越しをなさるのですか」

幸平は嘘偽りないことを示すように、大げさに驚いてみせた。雅は無視して続ける。

「一月から連載やつてるのはご存じですよね？」

「ええ、K社のやつでしょう」

「それが中々に好評でしてね。今度K社から本も出させていただけることになって。それでまともな収入が得られそうなんです、ここで安アパートと喫茶店を往復する生活からは卒業しよう」と

「なるほど、おめでとございます」

幸平は僅かに芝居がかかった口調で、祝福の言葉を送る。雅はそれをまともに関かなかった。幸平は雅がかつて売れっ子

だったことを知っている。その時代を振り返れば、雅がこんな生活をしていることなど、笑いの種にならないことを、彼は理解している。

「では出来るだけ早めのお返事をお願いします。でないといわりのライター探しに苦慮する羽目になるので」

「今日明日中にはご連絡しますよ。ダメなったら友人のライターでも紹介しましょうか？」

「お構いなく。ではいいお返事を期待しています」

机の上から伝票をさらって、幸平はゆっくりと店を出た。

雅はふっと息を吐いて背もたれに寄りかかる。入口のドアの鐘がカランカランとなつて、幸平が出て行ったのがわかった。雅がチラと見た幸平の表情は極めて無感情だったが、彼は人間なんてそんなものだろうと見切り、目の前のコーヒーをグイと飲み干した。

「それで、出るのかよ、パーティー」

カップに残った最後の一滴を卑し気にすする最中、雅は背後からの声を聞いた。雅はやや乱暴にカップを置くと、悪態を言うように言葉の牙を尖らせた。

「昨日の今日でんなこと決められるか、バカタレ」

「使い方間違つてんぞ、『売れっ子』」

背後の男はヌツと振り向いて、雅に視線を送る。

「そんなんだから『展開だけ天才』とか言われんだろうよ。語彙力と文章力つけるよ」

「昔よりはついたさ、ああ、昔よりはな」

雅はちよど歩いていた店員を呼び止めると、追加のコーヒーを注文した。こいつにつけて、と後ろの男を指差すと、彼は眉をひそめるが、それを妨害することはしなかった。

「先週借りた分じゃないだろうな」

「喜べ水上俊平、まだ150円残ってる」

「みみっつい奴だ」

俊平は自分のコップを持って雅の席に移る。やがて雅のコーヒーが運ばれてきてから、俊平は口から疑問を零した。

「引越し、嘘だろ？」

雅は俊平の顔をしばし見つめてから、ほどなく言った。

「ああ、だつてお前、俺が今どこに住んでるか知ってるだろ？」  
俊平は雅が『売れっ子』だった時代にできたライター仲間だ。雅が人気だった頃は数多の人間が雅の元に集まってきたが、それが徐々に薄れていくと、彼らは次第に離れていった。今も彼と仕事以外で交流を持っているのは、俊平を除けば数える程しかない。

「それで、どうなんだよ、実際」

「それは、どっちのことを訊いてるんだ」

「どっちもだよ」

俊平は雅の言葉を遮りつつ言った。雅は頭を掻きながら正直に答える。

「パーティーは、多分行きさ。昼間ちよいと出て行って、後で記事書くくらいなら猿でもできる。」

あつちは、ちよつと手こずるかもしれないけどさ」

「はぐらかすなよ」

雅が露骨に話題をそらすのを、俊平は無理やり引き戻す。

「そうだな、京子は——」

雅はそこで一旦言葉を区切り、考えるように虚空を見つめる。そしてしばらくしてから、フツツと意地悪く笑つて、楽しそうに行った。

「京子も、連れていけばいいんじゃないかな」

不用意にも、ドアに鍵はかかっていたいなかった。雅はドアの向こうの気配を察して微笑むと、ゆっくりとドアを開ける。

「なんだ、来てたんなら言つてくれればいいのに、京子」

ボロアパートの中心には一人の女性がいた。京子、と呼ばれた彼女は玄関口に雅を見つけると、律儀にスリッパを持って雅に駆け寄った。後ろではテレビがなんやかんやと喚いている。

「この部屋、なんでこんなに汚いの？また足の踏み場ないじゃん！」

嫌味がかつた言葉を右から左に素通りさせつつ、雅は履きなれていないスリッパをぎこちなく履いた。彼は部屋を見回し、自分の部屋が自分の出て行った時よりも大分綺麗になっていることを確認する。それでも雑誌や服が散乱し、流しが食器で溢れている状況は、彼が出て行った時のままのだけだ。

「あんまり出入りしてないからって、だらし過ぎない？」

「このだらしなさもキミがくれたものだよ」

「初めて出会った頃もこんな感じだったと存じ上げますが？」  
もう、と膨れて京子は居間という名の戦場に戻る。ゴミ袋は既に5個程が満腹に膨れている。何が入っているかは定かではないが、もはやこの部屋にそんな大層なものはおいてないだろうと、雅は気にも留めない。

「大変そうだな」

「誰のせい？少しは手伝つてよ」

「やだね。それで、京子」

「何？」

「今日はどうやって入った」

雅が訊くと、京子は部屋の窓を指差した。雅がよく見ると、小さな穴が一つ空いている。少し視線を逸らすと物でごちゃごちゃした机の上に真新しいアイスピックが置いてあった。「窓まわりの対策、もうちよつとしっかりしたほうがいいよ。これじゃあ空き巣に入られちゃう」

お前が言うことかよ、と口にしようにして、雅は躊躇した。毎度のことだ。押し問答にも彼は飽きていた。

「よくやるよな。それでやることかうちの清掃ときた」

「来るたびに汚くなってんだから、すごい執念だよな」

「……お互い様、だな」

苗京子は極端に言えばストーカーだ。雅が有名だった時代の、熱心な追っかけの一人だ。未だに彼の才能を信じて雅を

慕っているのは、彼も悪い気はしていないのだが、如何せんしつこい。手口も、精神も。

「いいかげんうちを避難所にするのもなんだからさ、このことか、じやなきや別なことか、ないの？」

引越しは嘘だが、引越すだけの金があるのは本当だった。雅は幸いにして、最近の仕事に恵まれている。それも割と安定した収入だ。その気になればもつといい、京子の手の届かない所にも住むことはできるだろうが、雅がその必要性を感じていないだけだ。

「んな金あるかよ」

雅はしれつと嘘を吐く。京子はそうなの、と真面目に心配そうな表情で、片付けに戻る。言いようのない罪悪感が雅に巢食うが、錯覚に違いないと彼は思い切り雑念を吹き飛ばした。

「にしても、窓から入ったんならドアの鍵開けとくなよ、危ねえな」

「え、ドア？」

京子は素っ頓狂な声を上げる。雅は京子が滅多な嘘を吐かないことを、身に染みて知っている。

「開けてないよ？」

その瞬間、先程まで柔らかかった雅の表情に影が落ちる。彼はゆっくりとドアに向かい、その様相を確認する。正常、異常に関連する点検し、舐め回すように見る。

カラン、と何かが郵便受けに入る音が、雅の耳に届いた。この家の郵便受けは中から郵便物を受け取るとき、蓋を開けて取るようになっていた。雅がゆっくりと蓋を開けると、大きめの封筒と小さめの便箋が、一つずつ入っていた。雅はその外装に不可解な点はないかをじっくりと見ながら、スつと二つの郵便物を取り出した。

血走った目が隙間から覗いている。

雅は思わず声を漏らした。そして急いでドアを開けるが、そこには人も、人の気配もない。まっさらな空白。確かなのは右手に掴む封筒と便箋だけだ。

「ちよつと、雅」

京子の呼ぶ声に雅は気付く。雅は執拗に郵便物を眺めながら、後ろ手にドアを閉め、鍵とチェーンを即座にかけた。スリッパを履くのも忘れヒタヒタと歩き、居間に腰掛ける。

「ねえ、雅」

雅はハツとして、京子を見る。掴んでいた郵便物を取り落としたみたいに床に置いてみせ、雅は京子の話を聞く態勢を取った。

「あれ、今日雅が会ってた人じゃないの」

雅は京子が指差したテレビを見る。ニュースでは街中で突然男が死んだことを報じていた。名前は確かに桐谷幸平と表示されている。

「そうだな……つてか、なんでお前が知ってたんだ」

「雅のことならなんでも知ってるよ？」

寒気を感じる雅をよそ目に、ニュースは自分勝手に進んでいく。原因不明の病死、最近のホテルでの表紙との関連。残

された文字列、『侵食者』。

侵食者。ふと雅は傍らの便箋を掴み取る。無愛想な装丁をしたその裡面には、差出人の名前が書いてある。雅は混乱と慟哭に頭を突かれ、思わず便箋を握り潰してしまいそうになる。

Dear : 梅沢雅

From : 侵食者